

# Eureka VI

六年制通信 No. 11 平成 30 年 7 月 6 日 (金) 号

## 試験のある光景

「<sup>いっすい</sup>一炊の夢」の話をもっとよく思い出します。この話は「<sup>かんたん</sup>邯鄲の枕」とも呼ばれています。昔、中国の都（邯鄲）を目指して一人の若者が立身出世を夢見て歩いています。ある村で白髪のみずぼらしい老人に出会う。えらく急いでどこへ何しに行くのかと問われ、若者は貧しそうな老人に侮蔑の目を向けながら自分の夢を語る。老人は、宿の主人がご飯を炊いているのだから、まあそう急がずに少し休んでいけと枕を渡してやる。若者は疲れもあって、その枕でうとうと眠ってしまう。そして、立派に出世して妻と五人の子供に囲まれ、大邸宅に住む夢を見る。夢の中で若者は、自分の波乱万丈の人生を体験するわけです。「ご飯が炊けましたよ」という声で目を覚ますと、今自分が見た何十年という人生はご飯が炊ける間の、そんな短い時間の出来事だったのだと気がつくわけです。元の自分の姿を再確認し非常に驚くとともに、若者は自分の思い描く立身出世のむなしさを悟り、故郷へと帰っていく…。

この話は「世の中の栄枯盛衰も一炊の夢よ」などと言って、人生は夢のように虚しいという喩に使われるのが普通でしょうね。しかし、夢の正体とは何か、時間とは何かといったことを真剣に考えだすと、このエピソードは非常に深刻な内容を含んでいる、そう私の先生が教えてくれました。学生の頃です。今、君と私が対話をしているが、これが夢ではないという証明ができるのか、確かそんな講義でした。皆さんも、少し時間をかけて、こういう、ある意味ちょっと虚しい問いかけに答えようとしてみると面白いと思いますよ。ほっぺをつねると痛いから夢ではない、そんな程度ではいけませんよ。

ところで、私は未だに試験に落ちる夢をよく見ます。どうして夢では必ず落ちるのでしょうか。合格する夢はまず見ない。荒唐無稽な笑える夢もけっこう見ますが、これは目覚めても疲労が残りません。ただ、試験の夢はものすごく疲れます。落ちる夢ですからダメージがあるのでしょうか。私はもう現実に何かの試験を受けるということは、自分が望まない限りないのですが、君たちはこれから何度も何度も試験を受けなければなりませんね。大変でしょうが、でも、試験が受けられるということは幸せなことでもあると思いますよ。

若い頃に阿部昭さんのエッセイを読んで、私はそのことを教えられました。阿部さんは何度も芥川賞の候補になった作家で、昭和 9 年の生まれですから、以前紹介した旧制高校の試験を受けた最後の世代です。家が貧しかったため浪人をするのも私学

へ進むことも許されない状態で、受験の苦しさを十分に味わいながら結局は東大へ合格するのですが、その受験勉強を振り返って、あれは実は人生で贅沢な時代だった、世の中へ出れば許されない自由、すなわち自分のためだけに勉強ができる自由、それを謳歌できる時代だった。そう回想しています。入社試験よりも大学受験の方が純粹だったとも書いています。

ところが、このエッセイを読んだ読者からの便りが届きましてね。その人は山形県の寒村に生まれ、農家でありながら満足に米を食べられないほどの貧困のため、受験自体ができなかった。高校へ進学できなかったことが自分の一生の苦しみでしたと綴ってあったのですね。この人は印刷屋のおやじさんになるのですが、阿部さんは「この人が印刷を業とするようになった事実に加え、止みがたい勉学への念が見て取れる。この人が成人してからも、つねに勉強勉強と思いつけていたことが、真の勉強の何であるかを語っていると思った」と書いています。そうして、自分にもこの人と同じような同級生が何人かいたことをいつの間にか忘れてしまっていたと。

昔の話ですから、例えば農家に生まれれば、子供は立派な労働力なのですね。勉強する暇があるなら働いてほしい、親はそう思うわけです。そういう状況で向学心を持ってしまったら、苦しむことになる。わかっている、向学心は抑えられない。今の私たちには理解できない悲劇ですね。この印刷屋のご主人も、学校の先生が、夜学でもいいから高校へ進学させてはどうかと父親にすすめているのを泣きながら聞いていたそうです。中学や高校へ進めるだけの学力を持ちながら経済的な理由で断念せざるを得なかった人の悲劇は現代の比ではないと思います。学びたいと願いながらも受験の機会を奪われた人たちがいたことを、私たちは知るべきですね。

私は学歴というものを、どこで学んだかということではなく、何を学んできたかだと思っています。学んできた歴史ということですね。現在進行形の。そう考えると、別に受験など大したことではないと思えるのですが、それでも受験の機会がなければどうにもならない。君たちは受験できる幸せに感謝すべきですね。

### 今週のおすすめ

・阿刀田高 『ナポレオン狂』 (講談社文庫)

著者の直木賞受賞作です。したがって初期の作品集なのですが、阿刀田さんのエッセンスがつまっていると私は思います。12の物語が、それぞれに面白く、不思議で、少し怖い。特に余韻に恐怖を残すように仕組まれた阿刀田さんの工夫が随所に見られます。ですから、一度読んで再読すると「なるほど伏線が見事に張られているなあ」と感心します。一つの物語で二度楽しめると言えますね。私は「来訪者」が一番印象に残っています。このプロットを思いついたときの作家のニンマリする顔が思い浮かぶわ。是非お読みください。

前回の答え：もどかしい

今回の出題：人の言うことを全部聞かないうちに、分かったと、ひとりぎめし、結果的にはピントはずれの言動をしたり、失敗したりすること。(答えは漢字で三文字)

BGMは蓮井朱夏(菅野美穂)の zoo～愛をください でした…。